

取材日：2017年8月25日



60名に上る糖尿病サポートチームがめざす 地域全体の糖尿病医療のレベルアップ。

Point of View

- ① コーチングの手法を用いて医療スタッフの主体性を育て、「糖尿病サポートチーム」を活性化
- ② チームが、教育、院内糖尿病改善、院外糖尿病改善、学問の4グループに分かれて活動
- ③ 院外の医療スタッフや住民に向けた勉強会、イベントなどの開催を通じて糖尿病の知識や情報を地域に発信

地方独立行政法人
総合病院国保旭中央病院
糖尿病代謝内科部長
小林 一貴氏

地方独立行政法人
総合病院国保旭中央病院
糖尿病代謝内科医長
大西 俊一郎氏

地方独立行政法人
総合病院国保旭中央病院
主任看護師
宮原 孝子氏

地方独立行政法人
総合病院国保旭中央病院
主任看護師
常世田 明美氏

地方独立行政法人
総合病院国保旭中央病院
臨床検査技師
宮負 哲氏

地方独立行政法人総合病院国保旭中央病院
理学療法士／診療技術局
リハビリテーション科統括リーダー
菊地 聡氏

地域の糖尿病医療の現状を 変えていくための第一歩

九十九里浜に面する千葉県旭市の総合病院国保旭中央病院は、989床の大規模急性期病院だが、地域医療の要として生活習慣病をはじめとする慢性期疾患の患者も多数受け入れている。たとえば、同院に通院する糖尿病患者は、薬物療法中の症例に限っても約4,500名にも及ぶ。

「糖尿病代謝内科の外来（常勤4枠、非常勤2枠）で継続的に診ているのはそのうち約3割程度で、1型糖尿病や妊娠糖尿病、また特に血糖コントロールがうまくいっていない患者さんなどです」と解説するのは糖尿病代謝内科部長の小林氏だ。

「私は2016年に千葉市の医療機関から赴任したのですが、当地域の糖尿病患者の多さ、血糖レベルの状況の悪さに驚きました（【資料1】）。

しかも、当地域で常勤の糖尿病専門医は、当科の大西と私だけです」（小林氏）

ある程度コントロールが安定している患者は、院内の他の内科が診て

いるが、それでも同科の2名の常勤専門医で1,000名前後の患者を診ているという状況だ。

小林氏より2年早い2014年に着任した医長の大西氏も当初、同地域の糖尿病医療の現状に愕然とし、患者が多い理由について考えをめぐらせたという。

「農業や漁業に従事し定期的な通院



左から小林氏、大西氏、宮原氏、常世田氏、宮負氏、菊地氏

をしにくい方が多い、果実や醤油といった特産品の摂取が好まれるなど豊かな自然や食材に恵まれた地方ならではの負の側面に気づきました。そして、『このまま外来で目の前の患者さんだけを診ていても何も変わらない。医師の力だけでは対処できない』と思いました」(大西氏)

糖尿病医療に対する危機感は同院の医療スタッフたちも抱いており、「糖尿病サポートチーム」が結成されていた。立ち上げにかかわった主任看護師の宮原氏が話す。

「10年以上前、日本糖尿病療養指導士(CDEJ)資格を持つ看護師や管理栄養士、薬剤師、理学療法士が集って糖尿病サポートチームができました。勉強会や糖尿病教室などを開催していましたが、私自身はもの足りなさを感じていました」(宮原氏)

大西氏は、その糖尿病サポートチームの活性化こそが、地域の糖尿病医療を変える第一歩になるだろうと考えた。

コーチングが主体性を引き出し その効果でチームが拡大

糖尿病サポートチーム活性化のため大西氏たちがとり入れたのは、人材育成の手法のひとつ、コーチングだった。

「同時期に着任した、横尾英孝先生(現・千葉大学医学部附属病院総合医療教育研修センター特任助教)と

ともにコーチングを勉強し、2人で各々5名のチームのメンバーを受け持ち、週に30分~1時間、3ヵ月を1クールとしてコーチングを実施。

コミュニケーションを重ねる中で、自発的な思考や行動が引き出されるよう尽力しました」(大西氏)

コーチングを受けたチームのメンバーたちは、自身とチームの変化を口々に語る(【資料2】)。

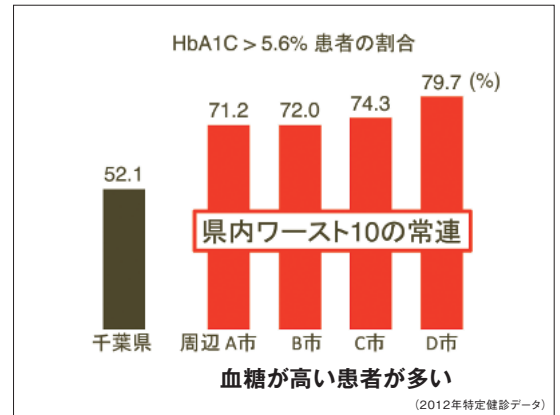
「自分の中で、もやもやとしていた方向性が、話をしていく中で整理され、目標に向かっていく意識が高まりました」(宮原氏)

主任看護師の常世田氏も「コーチングを受けて自分が本当にやりたいことが明確になり、もっと糖尿病ケアにかかわりたいと思うようになりました」と言う。

「大西先生の着任以前からチームのメンバーでしたが、ずっと受動的な立場でした。コーチングにより自分で考え、目標を立て、自信を持って主体的に動く姿勢を身につけられたと感じます」と述べるのは臨床検査技師の宮負氏。同氏は、コーチング後にCDEJ資格に挑戦、2015年に見事、取得した。

【資料1】

糖尿病サポートチーム活性化以前の 糖尿病患者の血糖コントロールの状況



チームの活性化のための活動が始まったあとに着任した小林氏も「コーチングによって引き出された主体性とやる気こそが、糖尿病サポートチームの持ち味、強みです」とコーチングの効果を評価する。

コーチングをとり入れる以前に22名だったチームは、今、10職種(医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師、理学療法士、歯科衛生士、健康運動指導士、医療ソーシャルワーカー、医療事務)60名の大所帯に。コーチングを受けたメンバーが、各部署で糖尿病やケアについて語ることで、広く医療スタッフの糖尿病医療に対する興味関心が高まり、チームが拡大していったのだ。

CDEJやLCDEが増加 院内連携も速やかに

糖尿病サポートチームは現在、教育グループ、院内糖尿病改善グループ、院外糖尿病改善グループ、学問グループの4グループで活動を展開している。

教育グループが最初に注力したのは、CDEJや、地域糖尿病療養指導士



(LCDE) の資格取得。

「糖尿病全般についての勉強会や資格試験のための実践的な勉強会を開いてきました。近隣施設の職員からも参加したいとの声が聞こえてきたので、今は院内だけでなく、広く地域の医療スタッフを対象とした勉強会になっています」(宮負氏)

2017年時点で、同院のCDEJは35名、LCDEまで含めると46名にもなる。この資格取得促進に大きく貢献したのが、2015年まで教育グループのリーダーを務めていた理学療法士の菊地氏である。

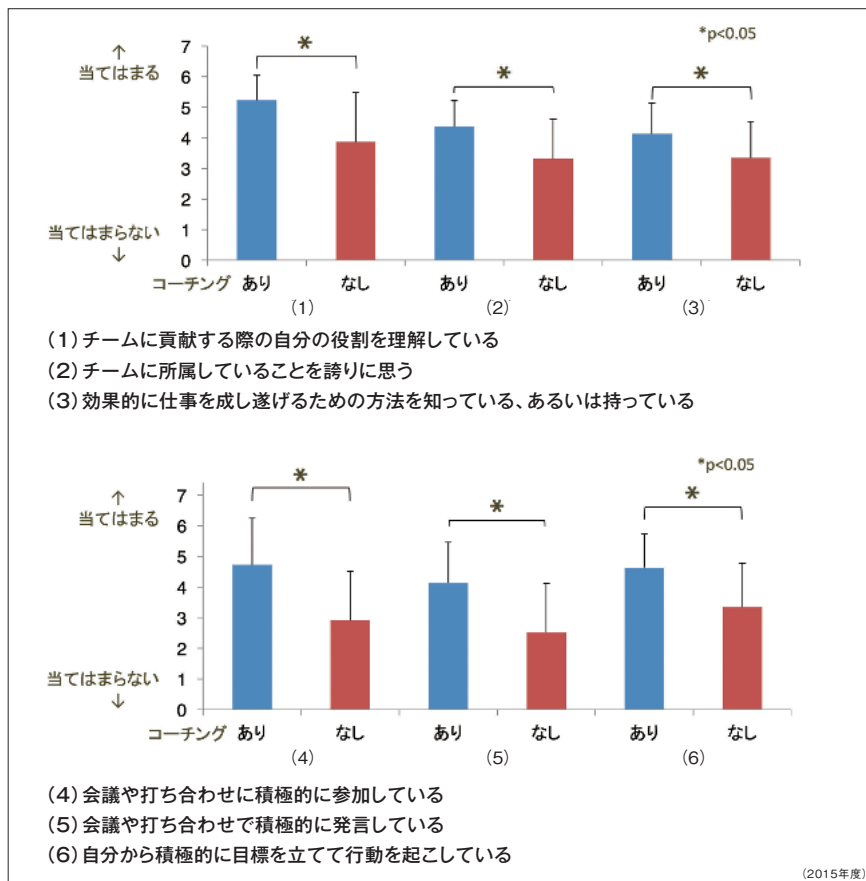
「私たちリハビリテーションのスタッフは、脳卒中や心筋梗塞などの患者さんの日常生活への復帰をめざして指導をしています。しかし、考えてみると多くの急性期疾患のベースに糖尿病がある。糖尿病を知ってコントロールする術を身につけない限り、患者さんは何度でもリハビリに戻ってくる可能性があると思いました。そこで、2012年にCDEJ資格を取り、糖尿病サポートチームの拡充と同時に加わったのですが、当時、同資格を持つ理学療法士は、院内で私だけでした」(菊地氏)

糖尿病サポートチームの活性化以降、菊地氏は自らも受けたコーチングの手法を駆使し、リハビリ部門で仲間を増やしていく。今では、CDEJ資格を有する理学療法士は17名に。1施設内のCDEJ有資格理学療法士の数では、全国で最多だそうだ。

医療職のための勉強会と同じく、質量ともに充実したのは、患者向けの糖尿病教室。以前は月1回の開催だったが、現在は糖尿病全般の基本からレクチャーする教室が週1回、ほかに透析予防指導教室などの応用版も随時開催されている。これらの教室を運営するのが、院内糖尿病改善グループである。同グループは、

【資料2】

コーチング受講者の意識の変化



フットケアチームなど、糖尿病サポートチーム外部との協働も多い。「糖尿病は多くの疾患と関係し、多職種への介入を必要とする疾患なので他の部門や診療科との協働が欠かせません。

院内連携がうまく運ぶように動くことも院内糖尿病改善グループの役割です」(小林氏)

イベントでの血糖測定や医療相談を通じて住民を啓発

そして、院外糖尿病改善グループは、文字どおり病院から飛び出している活動を担っている。「メインは、地域のお祭りなどのイ

ベントに参加し、糖尿病について啓発する活動です。会場で、各職種がそれぞれ血糖測定、栄養指導、運動指導、生活指導などを実施。医師による糖尿病相談の窓口を設ける場合もあります」(常世田氏)

「当院は行政とのかかわりが深く、旭市から地域とのコラボレーション企画を依頼されるケースがしばしばあります。それをコーディネートするのも、院外糖尿病改善グループです」(大西氏)

たとえば、旭市から「健診で血糖値が高かった人を対象に」との要望を受けて講習会を開く、地域の教育機関で働く養護教諭の集まりで話をし、小学生を対象に寸劇やマンガ

を使った食育を行うなど。

「糖尿病サポートチームが掲げている『地域全体の糖尿病を良くする』（【資料3】）というテーマのもと教育グループが院内のみならず地域の医療スタッフを教育、院内糖尿病改善グループが患者向けの糖尿病教室を開催、院外糖尿病改善グループが住民の啓発活動を行うといった流れは、必然的に生まれました。

3グループは、大きな目標達成のため各々独自の活動をしています」（大西氏）

地方での糖尿病医療モデルの構築をめざし持続可能な組織を

4つ目の学問グループは、2017年にスタートした。小林氏がリーダーを務める。

「チームによる糖尿病医療の質を上げるには、アウトカムとなるデータを収集して学会で発表したり、論文にまとめたりする機会が必要です。また、CDEJ資格を取ったスタッフの多くが5年目の更新時期を控えていることもあり、メンバーがさまざまな勉強を続けてスキルや専門性を高められるよう当グループを設置しました」（小林氏）

学会発表や論文は、糖尿病サポー

トチームやそのメンバーのレベルアップだけでなく、同チームの活動を全国に向けて発信する場にもなるだろう。

そして、ごく初期からチームに変わりコーチングを受けて主体的な活動を展開してきたメンバーたちは、それぞれに今後の活動目標やビジョンを持っている。

「理学療法士として糖尿病の1次予防、2次予防により積極的にたずさわりたいと思っています。数多い医療スタッフの中でも実地で運動の指導をできる職種は限られています。理学療法士ならではの指導を行うべく勉強し、ほかの職種と協働して良い仕事がしたいですね」（菊地氏）

「本来、臨床検査技師は患者さんと接する機会の少ない職種ですが、糖尿病サポートチームで活動しているおかげで、イベントでの血糖測定などで地域の人々と触れ合う場面が増えました。

今後は、検査データの解析や説明などを通して患者さんや地域の人々にも糖尿病医療の内容や必要性を伝えていきたい。いずれは、学会発表にも取り組みたいです」（宮負氏）

「患者さんにベストのタイミングでフットケアをしたり、糖尿病のきちんとした知識を伝えるため、外来と病棟の看護師同士が患者さんの情報を共有して、継続的なケアをもとに探るような連携を考えていかなければならないでしょう」（常世田氏）

「糖尿病サポートチーム内の看護師は、実はまだ少数なので私の課題は仲間づくり。近々院内の看護師を対象にした糖尿病の勉強会を

開く予定です。

加えて、地域の病院や診療所の看護師の方々の集まりでの活動にも力を入れるほか、看護師以外の医療スタッフに向けた糖尿病啓発も進め、地域を巻き込みながら力のある人材を多数育て、糖尿病医療の底上げをめざします」（宮原氏）

糖尿病サポートチームの活性化に大きく寄与してきた大西氏が、目標を語ってくれた。

「大都市と地方では、環境も、人々の考え方も、糖尿病患者の状況も大きく違います。そこで、当院の糖尿病サポートチームが中心となり、地方における糖尿病医療のモデルを構築したい。大きな夢ですが、いずれは『糖尿病医療は都会より地方のほうが、ずっと進んでいる』と言われるほどまでのモデルをつくりたいですね」（大西氏）

「それには、糖尿病サポートチームをしっかりと維持、成長させていかななくてはなりません。多職種のチームゆえ、それぞれの業務とのバランスを図り、うまくマネジメントする必要があります。また近年では、学会発表や論文のもととなるデータ収集・解析を行ううえでの厳しいルールのクリアも大切です。これらを引き受けて、持続可能な組織としてまとめていくことが、私の役割だと考えています」（小林氏）

小林氏や大西氏に見守られ、導かれながら、まだまだ伸びしろのある糖尿病サポートチームのこれからに期待がかかる。

【資料3】

糖尿病サポートチームの目標と目的

チームの目的 **地域全体の糖尿病を良くする**

チームの目標

チームを知ってもらう (2014年)
自主性を高める (2015年)
専門性を高める (2016年)
貢献する (2017年)

地方独立行政法人
総合病院国保旭中央病院

〒289-2511
千葉県旭市イ-1326
TEL : 0479-63-8111